

映画監督

内藤 瑛亮さん

鬱屈とした衝動を秘めた少年少女を描き続け、近作では『ミスミソウ』や『許された子どもたち』など、少年事件、いじめ問題などを題材とした映画を手がけている内藤瑛亮監督に、少年事件、いじめ問題などについての思い、これらの問題を映画の題材とすることへのお考え、作品を通じたメッセージなどをお伺いしました。

聞き手・構成：富田 寛之
写真撮影：坂 仁根



—— 私は、内藤監督の『許された子どもたち』という作品の題名を見たときからすごく気になっていて、一度お話を伺えたらと思っていたんです。よろしくお願い致します。

よろしくお願いします。

—— 内藤監督が、監督を目指すようになったきっかけとか何か影響を受けた作品とか、もしあれば教えていただきたいんですけれども。

ずっと映画監督を目指そうと思っていたわけではなくて、どちらかというと漫画が好きで絵を描くのも好きで、漫画家になりたいなと思っていました。とはいえ、そんなにパツとうまくいくわけもなく、教員免許を取って採用試験も受けて、教員にはなってしばらく働いていたんですけど、土日とか夏休みを使って自主製作で映画を作り始めました。なので20代中盤くらいで初めて映画を作ってみたいかと思ったような形ですね。

—— そうなんですか。先生をやられていた期間は、どのくらいなんですか。

5年くらいですね。

—— その間に生徒とか親とかと接する機会があつて、それが作品に影響を与えたということもありますか。

そうですね。

—— 今回、監督の作品『許された子どもたち』と『ミスミソウ』について拝見したんですけれども、他の作品も含めて、少年が主人公の映画が多いと感じましたが、少年たちに焦点を当てた映画を作ろうというのが、監督の中にあるんですか。

自分が10代のころ少し暗かったこともあって、みんなめっちゃくちゃになって欲しいみたいな暗い欲望があるというか。酒鬼薔薇聖斗事件の犯人と同年代だったりして、何となくああいう方向にいつてしまう感じが分かるというか。共感という言い過ぎですけど、自分があんなったら怖いなって結構身近に感じていました。なので「そうってしまった、なり得たかもしれない、悪い道に進んだ自分」みたいなイメージで、罪を犯してしまう少年少女というのが自己投影しつつ描きたい対象としてあるのだと思います。

—— 監督自身は、作品の中で描かれている、いじめっ子の側に立つというわけではなかったのですね。

そうですね。どっちかという、いじめられる側。思い切りいじめられていたわけではないんですけど、いじられるというか。小柄だったし、運動もできないので、いじめの被害者に転じる不安感には常にありました。『ミスミソウ』はそういう不安感をフィクションの形で爆発させた作品です。『許された子どもたち』に関しては、どちらかというに加害者だった子供たちに興味を持ったというか。加害者が生まれなければ被害者も生まれないだろうということ。

——なるほど。『許された子どもたち』のオープニングで、後に加害者となる主人公が小さいころいじめられて血を流して帰ってきてお母さんと会うというシーンがあるんですけど、あれは、いじめっ子をつくる要因みたいなことの表現でしょうか。

内藤朝雄さんといういじめに関する研究をされている方の本をいくつか読みまして、いじめ被害者が加害者に転じてしまうケースは多々あるそうです。その場合のいじめ行為というのはある種の治癒行為というか、癒やしになってしまっている。いじめられて弱かった自分をいじめの加害者に転じることで打ち消そうとしているというか、その心理はすごく分かるなと思ったんです。

——『許された子どもたち』の作品の中で、殺した理由はあったかもしれないけれども覚えていないという台詞がありました。監督の意図はどのようなものだったのでしょうか。

色々な少年事件の加害者少年の本や、川崎中1殺害事件の傍聴記録なども読んだのですが、加害者の少年自身が「何で自分は加害行為をしてしまったのか？」と、ぼんやりしているような印象がありました。ロジカルに説明できていないというか。衝動的な部分もあるし、悪意はあったんでしょうけど、ここまで発展させる気はなかったんじゃないかという印象がありました。周囲の人が理由をきっちり語り合う場を設けて、子供から引き出すために、頑張っって歩み寄らないと、自分で理由をはっきり形にできないのかなと思ったんですね。『許された子どもたち』でいうと、そういう場を彼は失ってしまって、だから理由を説明すること

ができなくなりました。それは自分が教員をやっていた経験もあって。子供は問題行動をしてしまうものですが、それ自体は悪いことじゃない。問題行動を自分で反省したり、「衝動的にやってしまったけど、これこれこういう鬱屈があってやってしまったんだ」というのが判明すると、「じゃあ、それを解決していけばいいね」という方向にいけるんですが、「とにかく僕は悪くない」「この子は悪くない」となってしまうと、その根っこにあるものが結局解決しないまま、本人もそれを理解できないまま進んでしまって、しこりとして残ってしまったり、いずれ大きな問題になってしまったりするのではないかと、と思っています。

——監督の作品では、いじめのシーンがよく出てきて、その描写がリアルだなというのを感じたんですけど、それは教員のときに感じたことと関係しているんでしょうか。

僕が教員として勤めていたのが特別支援学校だったので、健常者のいじめとはちょっと違ったんですが、僕が10代だったときを思い出すと、いじめとかはやっぱりあって。僕はどっちかという傍観者みたいな立場で、いじられキャラみたいな感じだったから、いつ被害者になってしまうかという不安は強くありました。当時はいじめられる側にも責任があるみたいな風潮もあって、短気だとか、ちょっとダサイとかって勝手に自分で理由をつけて、傍観者でいることを自分に許してしまっていたというのがあって。

それは今の若い子たちと話しても、あまり変わってない印象があります。『許された子どもたち』の撮影前に、出演した子供たちと一緒にいじめに関するワークショップを行いました。その一環で、「いじめのロールプレイ」をやったんです。被害者役と加害者役を設定して、それぞれに抽象的な名前を付ける。「アイスクリームちゃん」「アイスクリーム君」みたいな感じで。加害者役には設定にちなんだことで被害者役を罵ってくださいとお願いする。すると「お前のせいで太ったんだ」とか「うんこみたいな形しやがって」とか「すぐ溶けるなよ」みたいな感じでみんな罵倒する。

これが思いのほか、すごく盛り上がったんです。加害者側、罵倒する側からすると、いかにきついフレーズ

で面白く沸かせるかという方に心理が働いて、より過激な言葉を選んでいく。そのときに被害者の心がどう痛むかというよりは、加害者チームにいるみんなの受けが欲しいみたいな感覚になってしまって、高揚感もあって、笑い声に溢れていました。終了後に振り返って話してみると、結構怖いことだねと思って。そういう加害者性は誰にでもあるんじゃないか、ということ話をしました。

みんなで誰か1人を攻撃することに、我々はどこか高揚感や喜びを覚えてしまうところがある。だから、突出した悪人がいていじめをしているというよりは、そういう部分のセーブが利かずに出出してしまっていると。それに僕はブレーキをかけないといけないよね、みたいな話を。この体験を通じて実感を得たので、映画内でいじめ加害者役を演じる子には活かしてもらいました。いじめ加害者は楽しんでやっているし、被害者側に責任があると思って行動していると。

——監督の作品の中では、いじめのターゲットの人がいなくなってしまうと、また代わりの人が出てきてしまうみたいなところが描かれていましたが、ターゲットがいないと、物足りないという思いがあるのですかね。

そうですね。代替可能であって、サンドバッグにされる対象。それは、下手すると加害者側にいる人でもいつか転落して被害者側にいくかもしれないという、その緊張感が子供たち自身にあるなと感じました。出演した子供たちともいじめについて話したのですが、大事なことは「LINE」で送らないようにしていると言っていました。それは、下手したら「LINE」で誰かの悪口、例えば「あいつ嫌だよね」という誘い水があって、同調して悪口を「LINE」で送ったら、それをスクリーンショットされて「あいつ悪口言っているぞ」と晒されてしまう。誘い水かけられただけなんだけど、つるし上げられていじめられる対象になってしまう。だから、本音は形に残らないように口頭で。悪徳政治家みたいな（笑）。

そんな緊張感でいるんだというのが、ちょっと怖い。いじめという本質的なところは変わってないと思うんですが、形に残ってしまうし、ネットで晒されてしまったら、デジタルタトゥーとなって半永久的に消えな

いんじゃないかという不安があって、すごく緊張感に晒されながら、今の子どもたちは交友関係を築いているんだなと痛感しました。

——『許された子どもたち』では、少年審判のシーンも描かれていましたね。

少年審判がどういうものなんだろうということにすごく興味がありました。大人が受ける刑事裁判とはこんなに形が違うんだとか、裁判官と呼ばれる人が結構柔らかい口調でしか聞かないんだとか、もっと厳しく追及しているものだと思っていたけど、実はこうなんだと見せることが、この作品のやるべきことなんじゃないかなと思って。

少年審判は、大人の刑事裁判みたいに事実をつまびらかにするというよりは、少年の更生を第一にしていると思うんです。それはいいことだと思うんですが、罪を犯した少年が、その罪をしっかりと認識するという意味では、事実が明確になった方が後々の更生には役に立つというか、プラスになるはずだと思うんですけど、ある種の性善説に立って、その少年の更生を促すようなやり方のときに、事実が結局明確にならない場合もあるなって感じて。その弊害を描きたかったんです。

——『許された子どもたち』には、弁護士が付添人に出きますよね。拝見して、弁護士に対する不信感とかがあらわれるのかなというのをちょっと思ったんですけど（笑）。

ちょっと悪く描き過ぎちゃったかなと。今日、ここに来るの怖かったです（笑）。でも、あの人なりにロジカルに考えた上で、少年を救うにはどうしたらいいのかという立場で、少年の利益を第一に考えて行動したという形で描きました。僕は個人的に不信感があるわけではないんです（笑）。

——『許された子どもたち』では、加害者少年を正しく導いてくれる大人が出てこない、大人が踏み込んで救ってくれるような展開にはならないですが、そこはあえて描かなかったということでしょうか。

フィクションだと乗り越えていくような話が多いと思うんですけど、贖罪する機会を奪われていくような話にしたいと思っていました。

——なるほど、そうですね。

いかに失敗してしまうかみたいな感じにしたいくて。唯一、同級生の女の子が救いになるはずの存在だったと思うんですけど、それすらも失敗してしまうという風にしたいなと思っていました。だから「あそこでああしておけば」と思いながら観ていただければいいなと思っています。

——救ってくれるはずの、正しい方向に導いてくれるはずの人を、主人公は拒絶をしてしまったということ、感じてほしかったということですね。

そうですね。本来は彼女を選んで親から自立するというか、よく親殺しが象徴的な感じで描かれて成長していくみたいなパターンが多いと思うんですけど、この作品は、その親殺しに失敗する子供の話になっています。少年事件の謝罪の事例などを読んだときに、やはり贖罪はそう簡単なものではないし、被害者自身が謝罪を受け入れられないということもある。作品の中でも謝りには行くけど、何を謝っているのか分かってないんじゃないかと突きつけられる。本当は、そこから続けていかなきゃいけないんだろうなと思うんです。

——少年事件の更生とか謝罪について調べられたんですか。

色々な文献を読みました。「(加害少年が)いきなり家に来て土下座したけど、自分に酔っているだけ感じた」とか。「手紙が来ていたけど、途中から止まってしまった」とか。

——新しい構想や新しい作品を考えていますか。

今回はある意味で贖罪や更生に失敗してしまう話なんですけど、ちゃんとフィクションとしてそこが成功するパターン、前に進んでいける話を今度は描きたいなと思っています。

——確かに『許された子どもたち』のラストは、私とかも突き放された感が若干見ている人間としてはあって、「え、どうしよう」みたいな思いも少しあったので、そこら辺を描いてみるということですか。

そうですね。

——フィクション的にとすることは、やっぱりあまり現実にはないと感じられているのですか。

そこは難しいところなんですけど、あまり絵空事にはならないようにしたいとは思っています。ちゃんと着地したなという感じのものを次は描きたいと思います。

——今回は、弁護士との面談や裁判所での少年審判でも、真実と向き合って反省する機会が与えられなかったから最終的にうまくいかなかったということですね。逆に裁判所とか弁護士とかに対して望むものはありますか。

そんなにあまり偉そうに言えないです…。

——いいえ、せっかくの機会なので。

加害者になるような少年少女はなかなか心を開かないと思うんです。そこにはすごい問題があったりして、カウンセリングや心のケアがまず大事なかなと思っていて、罪を償うとかどうかよりもうちちょっと何個か手前で、何かが引っ掛かっている子もいるんじゃないかなと思うんです。そもそも罪と認識する前の段階というか。例えば、発達障害だったりしても、そういったことに対するケアを受け入れてなくて、本人も保護者もその自覚が無くて、犯罪の方にいってしまっていると。でも、そもそも犯罪を認識できるような教育を受けられてないという、そういうケースもあるんじゃないかなと思っているので、罪と向き合う前段階の部分がちゃんとケアされるといいんじゃないかなと思います。

——今日はありがとうございます。次回作をぜひ期待しております。

ありがとうございます。

プロフィール ないとう・えいすけ

1982年生まれ。愛知県出身。映画美術学校フィクションコース11期生修了。特別支援学校に教員として勤務しながら、自主映画を制作する。退職後は『ミスミソウ』『許された子どもたち』等を手掛ける。WOWOWドラマ『DORONJO』が10/7より放送・配信開始。